

北海道立市民活動促進センターは、営利を目的としない、地域の様々な課題を自ら解決しようとする道内の市民活動を応援しています。

特集

道内で活躍する市民活動を紹介します

平成 26 年度の当センター事業で、道内で活躍している市民活動団体の活動を集録した「活きいきまちづくり～北海道の市民活動レポート 2014」（当センターホームページで閲覧できます）を作成しました。その一部を抜粋して順次ご紹介しています。

今回は「母恋駅を愛する会（室蘭市）」「NPO 法人佐々木榮松記念釧路美術館（釧路市阿寒町）」の 2 団体の活動をご紹介します。

母恋駅を愛する会(室蘭市)

～ 活気に溢れたあのころを取り戻したい ～

映画やドラマでは駅を舞台に様々な人々の物語が描かれる。駅には出会いや別れがあり、人々の思いが交錯する特別の場所でもある。昭和 10 年に開業した母恋駅もそんな乗降客たちのドラマを静かに見守ってきた。



小さいが趣のある母恋駅

駅がある母恋は、アイヌ語の「ポクセイ・オ・」（ホッキ貝の沢山あるところ）に由来し、母や恋は当て字であるといわれている。同駅はその名前や、木造のどことなく哀愁

を感じさせる駅舎の佇まいから全国の鉄道ファンの注目を集めている。

この駅で毎月 1 回、待合室でイベントを開催しているグループが「母恋駅を愛する会」。20 年間活動を続け、2013 年 3 月には 200 回を達成している。

■ 忘れられない駅の思い出

筆者が訪ねたイベントでは、「中居さん一家による楽しい音楽会」が行われていた。会のきまりとして、イベントが始まる前には「地球岬」「未来（あした）キラキラ」を歌うのが恒例だ。この日、駆け付けた室蘭市の青山剛市長も集まった地域住民ら約 30 人

とともに歌った。

音楽会に出演した室蘭市内に住む中居力さん、千文さん、奏ちゃん（小学 1 年）一家が歌やオカリナなどを披露。

待合室で行われているから当然、乗降客もあるし、ときおり列車の発着を知らせるアナウンスも聞こえる。でもそれがあって温かみを増し、このイベントにふさわしい味わいを醸し出す。

ライブが終わると演奏者とともに、会のメンバーが、元の待合室の状態に戻す。準備や片付けはすべて 70 代以上の高齢のメンバーが行っているのだ。代表の久保田純子さんは 90 歳。テキパキとした動きや会話には少しも年齢を感じさせない。久保田さんは、会の活動のほかにもボランティア活動を行ったり、55 歳から始めた日本舞踊を踊ったり、市民向け大学に通ったりするなど精力的に毎日を過ごしている。「体にムチ打ってやっているんです。この会をなんとか続けるために負けていられないですから」と久保田さんは笑顔で語る。

ここまで入れ込むのは久保田さんにとって母恋駅には忘れられない思い出があるからだ。

久保田さんは室蘭市生まれ。1945 年 7 月、一般人 430 人以上が亡くなった室蘭艦砲射撃の中、生き残



ユニークな待合室での音楽会の様子。音楽に合わせて口ずさんだり手拍子したりする人も

母恋駅を愛する会（室蘭市）

った。父親は戦時中母親や兄弟たちを残し満州へ。母親は48歳のときに「純子頼むね」と言い残して亡くなった。このとき、久保田さんは女学校を卒業したばかりの18歳だったが、母親の言葉を自らの使命として親代わりとなって幼かった妹や弟が大きくなるまで面倒を見続けた。

中でも15歳の弟が、志願兵として出征するときに涙を流して母恋駅で見送ったことを「絶対に忘れることができない」という。「母親代わりをした原点であり思い出の地がこの母恋駅なのです」と久保田さんは当時を振り返りながらしみじみと語る。

会のメンバーにもそれぞれの駅への思い出があるが、1日の乗降客が8000人という賑わった当時の記憶が忘れられないようだ。

利用客が減り、寂れゆく駅と町の状況を見かねて当時の代表が東室蘭の駅長へ嘆願書を持参、その嘆願書が駅長から札幌の本社に渡り、1996年9月13日に許可された。それをきっかけに久保田さんを含む代表に賛同した市民らで会を結成した。

2013年に前代表が体調を壊し、やめることになったため、会の存続も危ぶまれたが、「続けたい」と久保田さんが新しい代表になった。

会員は室蘭市や室蘭にゆかりのある鹿児島県在住の20人。運営資金は年に1度会員から集める会費と市の助成金で、その中から出演者たちへのガソリン代やお茶代などが支払われる。

■ 好評博した200回記念イベント

これまで、一人芝居や童謡の合唱、交通安全教室や室蘭艦砲射撃を忘れないようにと平和の紙芝居など各分野の出演者が来場者を楽しませてきた。「社会



“社会を明るくする運動”に貢献したとして法務大臣から贈呈された感謝状を手にする代表の久保田純子さん

を明るくする運動のお話」は毎年実施しており、2014年には“社会を明るくする運動”に貢献したとして、法務大臣から感謝状が贈呈されている。

200回の記念イベントの際には、日本舞踊の正派若

柳流若樹会師範の實松千恵子さんと、名取りである久保田さんが、舞を披露し、集まった80人以上の人がその舞に魅了された。

駅のファンは、地元住民や鉄道ファンだけでなく著名人にもおり、ネーミングが気に入ってテレビ番組の収録で偶然駅を訪れた俳優の阿藤快が会に参加し、その模様がテレビ放映され「こんないいネーミングはないし、いい駅なんだからもっとPRしたほうがいい」といわれ、会員の励みになったという。

■ 駅周辺エリアの活性化にも一役買う

活動はイベントを開催するだけでなく、駅舎を、乗客をもてなすような環境にしたり、PRしたりすることによって周辺の活性化にも一役買っている。

2012年5月には、「恋」という字がつく全国4カ所の鉄道会社が連携して各エリアの活性化を目指す「恋駅プロジェクト」の第1回ミーティングが登別市で開かれ、同会のメンバーも参加した。

会は200回を超え、久保田さんは気持ちを新たに「吹雪でも台風の日でも1度も中止することなく、よくここまで続けることができました。見に来てくださったり、手伝いにきてくださったりした方々のおかげです。自分の体が許す限り続けたい。そのためにも特に若い方々に会員になって欲しいですね」と語った。

最後に「母恋駅は久保田さんにとってどんな存在か？」と尋ねるとこんな言葉が返ってきた。

「母恋駅を見るとつい母を思い出してしまいます。当時としては珍しく女学校にも通わせてもらったり、教育熱心で活動的な面もあった母でした。その母がずっと見守ってくれているように感じます。母恋駅は私の生きがいなんです」

■ 連絡先

〒051-0005
室蘭市新富町1-2-22
ケアハウスふれあい母恋202
代表 久保田 純子（くぼた すみこ）
TEL 090-8636-1960

NPO 法人佐々木榮松記念釧路美術館（釧路市阿寒町）

NPO法人佐々木榮松記念釧路美術館 （釧路市阿寒町）

～ 美術館を柱にエリア一体を活性化 ～

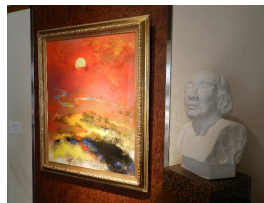


鳥が羽を広げているようにも見える「釧路湿原美術館」

澄み切った晩秋の青空に鳥が羽を広げている。釧路市の阿寒湖のそばにある「釧路湿原美術館」はそんなふうにも見える。この美術館には北海道出身の画家・佐々木榮松（ささきえいしょう）の油絵、水彩、デッサンや遺品などを常設展示している。

佐々木氏は、夕陽に染まる釧路湿原を描いた画家として知られており、また、釧路湿原の奥深くまで幻の魚「イトウ」を追い求めるなど釣り師としても有名。

この美術館は、佐々木氏に寄せられた700件余り約2000万円の寄付金で建てられた。中に入ると、壁には寄付したファンたちの名前が書かれた名札がずらりと並んでいる。



館名を決める際のきっかけになった「釧路湿原」。この美術館のシンボルだ。右は佐々木氏の胸像

■ 大勢のファンがかけつける中、オープン

佐々木氏の絵を寄贈したのは、運営する「NPO 法人佐々木榮松記念釧路美術館」の副理事で副館長を務める高野範子さん。佐々木氏が98歳で亡くなるまで10年間、法定代理人をしながら、高野さんの家族も含めて、佐々木氏の身の回りの世話や介護のほか、個展の企画や開催を代理で行うなどして最期を看取った。

佐々木氏との出会いは1994年4月のこと。たまたま範子さんが佐々木作品を収蔵するJR釧路ステーション画廊（以下JR画廊）を訪れ、そこで佐々木氏と話し込むうちに意気投合したことから始まった。

佐々木氏が亡くなるまで10年間世話ができた理由を尋ねると「生け花の道を志していた私と先生の美に対する感覚すべて含めて感性が一致したことです。また、作品が生まれる瞬間に立ち会えることと、

先生が一人でいると生まれてこないものも私と会話することによって生み出してあげられること。例えば、先生が空き箱にデッサンや墨絵をサラッと描いたりするだけで作品になったり、庭を一緒に見ていて一句、歌が生まれたり。こんな幸せなことはないですよ」と笑顔で答えた。

JR画廊が民営化とともに閉館すると、高野ご夫妻が佐々木氏の自宅で作品を保管した。約600点の絵画等の遺贈を受けたため、「このまま作品を家で眠らせておくのはもったいない」と30年来のファンで東京在住の片野良一（理事長）さんや高野夫妻ら17人の有志が美術館の設立委員会を設置。2012年12月にNPO法人の認可がおり、翌年の6月15日に美術館をオープンした。

運営は市の事業委託や寄付金、会費、利用料金などでまかなわれている。また、グッズや絵画の委託販売の収益もあるという。

会員は、正会員が100人、賛助会員250人で国内のみならず、海外在住の人もいるという。

来場者数は、1年を通して平均月20人前後。ホームページやSNSの「フェイスブック」などを活用し、PRしているため、アジアを中心とした旅行者や学校など団体が来場することも増えてきた。

■ ユニークなエピソードを交えた 「佐々木榮松講座」

美術館がオープンして日は浅いが、ユニークな企画を数多く打ち出していることで注目を集めている。館内は音響も良いことから、音楽イベントが開催され、作品をモチーフにしたウクレレの演奏会や木管五重奏の演奏会なども行われている。

また、範子さんが講師となって佐々木氏の人物像を様々な切り口で分析し、魅力を伝える講座も開催されている。

筆者が訪ねた10月18日は、「油絵の誕生した秘話」と題してスライドを使いながら、釧路空襲で亡くなった4歳の娘の幻影を題材にした幻想の少女「フローラ」を描いたシリーズ作や湿原をテーマにした作品など佐々木氏の代表作についての芸術論、佐々木

NPO 法人佐々木榮松記念釧路美術館（釧路市阿寒町）

氏の画家としての評価などについて熱のこもった口調で語りかけていた。

さらに「みんなで作ろう！アニメーション」と銘打ち、佐々木氏作の童話をもとにしたオリジナルのアニメ「エイショウブラザーズ（予告編）」を制作した。偶然スタッフの中にアニメの制作を経験した人がいたことから実現したという。このアニメの「コマ」となるぬり絵は、市民や全国各地、スペインのイビサ島の住民ら 530 人の協力のできたもので、試写会はメディアに取り上げられるなど注目を集めた。

理事に旅行会社 JTB のアジア局長がいたことが縁で、知床など道東を回るツアーのスポットのひとつとして組み込まれ、2014

年からは冬の時期のツアーも加わった。

海外からの観光客が増えたことから、副館長による英語ガイドから英語音声によるガイドも導入していくという。



高野範子副館長が佐々木氏の人物像や作品の魅力を伝える講座では、受講者たちが熱心に耳を傾けていた

■ エリア一体で冬の集客目指す

現在の悩みは、全道一低い気温になることもあるという冬の時期に利用客が大幅に減ってしまうこと。年中無休で営業しているため、暖房費がかかることも悩みの種だ。しかし、この美術館が世界のどこにもないオンリーワンであることの魅力を発揮する季節は、まぎれもなく冬だ。近くには阿寒国際ツルセンターがあり、美術館の窓からは丹頂ツルはもちろん、オジロワシ、大鷲、白鳥など雪原を舞う貴重な鳥たちを間近に見ることができる。

阿寒国際ツルセンターは前の千円札の裏に描かれた絵の元になった写真が撮影された場所として知られ、冬だけでも 2 万人のカメラマンが訪れる。

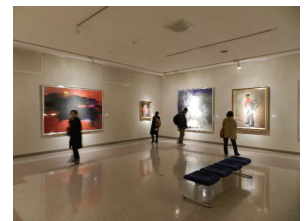
同センターをはじめ、温泉、レクリエーション施設、道の駅など美術館周辺は見どころが多く、このエリア一体を活性化しようと市や商工会議所などで取り組む「阿寒丹頂の里プロジェクト委員会」も立ち上がり、高野館長はそのプロジェクトの理事も務

める。こうした取り組みや地元での冬場のイベントを通して美術館の集客と合わせて地域の魅力発信につなげていきたいという。

さらに、美術館にとって好機が今年やってくる。道東道の本別—白糠—阿寒間が開通するからだ。札幌から 4 時間程で来ることができるようになり、しかも本別から阿寒間は無料で利用できるため、これを機に道東だけでなく十勝管内や札幌圏など広く PR して集客したい考え。

高野館長は、「私どもの美術館は、演奏会を開いたり、アニメを作ったり、普通の美術館や博物館など公の場所ではなかなか出来ないことが自由にできる場所に特徴があります。グッズ販売も飛び込みで『置いてください』と言われれば、『じゃあ置いてみましょうか』とか『演奏させてください』と言われれば『やってみましょう』とか、とにかく楽しくやろうというのがモットー。どこにもないものがここにはあるので手作りっぽい、あたたかい美術館になればいいなと思っています」。

佐々木氏は生前、人が多く集う美術館こそが自分の作品展示にふさわしい場所と願い、亡くなる 10 ヶ月前には、改めて作品を見ながら涙を流し、「未来の人に観てもらいたい」と語っていたという。佐々木氏のこうした思いと共に、これまでの美術館の枠を超えた活動が新たな魅力を発信、それを目当てにまた人が来るといった好循環が生まれようとしている。



裸電球の下で絵を描く佐々木氏のアトリエでの色を再現するため、照明にも工夫をこらしている

■ 連絡先

〒085-0245
 釧路市阿寒町上阿寒 23-38
 理事長 片野 良一（かたの りょういち）
 館長 高野 英弥（たかの ひでや）
 TEL：0154 - 66 - 1117
 FAX：0154 - 66 - 1121
 Email：shitugen946A.M@bz04.plala.or.jp
 URL：http://www12.plala.or.jp/kushiro/

センターインフォメーション

【道立市民活動促進センター設備のご紹介】

当センターでは、市民活動に取り組む方々が利用できる打合せスペースやパソコン・印刷機などを設置しています。

◆交流・研修コーナー

打合せや会議に使える6人掛けテーブルをご用意しています。



◆情報提供コーナー



インターネットから情報取得や印刷物の作成にご利用いただけます（プリント可能）。

◆資料展示コーナー

市民活動団体のリーフレットや会報、道内市町村の広報誌などが展示されています。



◆相談・受付コーナー

市民活動に関する疑問・質問に相談員がお応えしています。「現在の活動団体をNPO法人にしたい」など、お気軽にご相談ください。

◆作業コーナー

印刷機・紙折機・丁合機・裁断機が設置されており、市民活動団体の会報やチラシの作成にご利用いただいております。印刷機は黒・赤・青からの2色刷りが可能な機種で、低廉な費用で印刷ができます。



ホームページで情報発信中の「北海道市民活動団体情報提供システム」

このシステムは、道内のNPO法人と市民活動団体の情報を提供しています。

当センターのホームページトップ画面の画像下の「北海道市民活動団体情報提供システム」をクリックしてください。

<http://www.do-shiminkatsudo.jp/>



【検索機能】

- ・団体名、活動分野、地域、市町村、キーワードによる市民活動団体の情報検索が可能です。
- ・NPO法人の定款、事業報告書、財産目録、貸借対照表、活動計算書／収支計算書の閲覧が可能です。
- ・各団体のイベント情報、ボランティア募集情報の閲覧が可能です。

【登録すると】

- ・団体の活動のPRやイベント、ボランティア募集等の情報発信が可能です。
- ・どこからでもログインして情報（イベント・ボランティア募集情報等）の入力・編集が可能です。

●是非、ご活用ください。

◆ 助成金情報 ◆

●池田屋「子ども思いの森 生きるちからファンド」●

子どもたちの生きる力を育むため、子ども思いの各種事業を支援します。

■助成対象

子どもたちを対象に私たちが考える生きる力（考える力、伝える力、繋がる力）を育む活動を行っている市民活動団体及び個人

■助成金額：1事業に対して30万円以下

※補助対象経費の合計額から他の収入を控除した自己負担額の1/2以内で、予算及び申し込み状況を勘案して当ファンドが定める額

■対象期間

2016年6月1日～2017年5月31日実施の活動

■申請期間：2016年4月30日(土)必着

■応募書類

- ・事業提案書（様式第1号・計5枚）
※Excel形式、PDF形式どちらでご提出いただいても構いません
- ・前年度（平成26年度）決算書類（収支計算書・財産目録など）
- ・前年度（平成26年度）活動報告（事業報告書など）
- ・応募時（平成27年度）年度の予算書類
- ・応募時（平成27年度）年度の活動計画書（事業計画書など）

■応募先：有限会社池田や 子ども思いの森事業部
「子ども思いの森 生きるちからファンド」受付係
TEL：054-266-3790

※詳しくは、次のホームページをご参照下さい。
<http://kodomoomoinomori.jp/>

●公益財団法人キリン福祉財団● 平成28年度

「キリン・子ども「力」(ちから) 応援事業」

■助成対象活動

子どもたちが健全に成長していくことを願い、「子どもたち自らが主体となって計画・実施する活動」を助成します。本事業は親などの大人が主体となり、子どもの健全な成長を願う“子育て”とは異なり、子どもたち自らが“主体”となることから、大人ではなく子ども自身を申込者とさせていただきます。

■助成対象団体

18歳以下のメンバーが中心となって活動する4人以上のグループ。
(既にあるグループでも、今回の計画のために新たに結成するグループでも構いません。)

■助成金額

1件(一団体) あたりの上限額 15万円 (総額 500万円)

■応募期限：2016年4月28日(木)消印有効

■応募先：公益財団法人キリン福祉財団
TEL：03-6837-7013
FAX：03-5343-1093

※詳しくは、次のホームページをご参照下さい。
<http://www.kirinholdings.co.jp/foundation/>

●ニッセイ財団 2016年度高齢社会助成● 地域福祉チャレンジ活動助成

1. 地域包括ケアシステムの展開につながる活動へチャレンジするための助成

2. テーマ

地域包括ケアシステムの展開につながる次の4つのテーマのいずれかに該当する活動

1. 認知症（若年認知症を含む）の人の地域での生活を支えるチャレンジ活動
2. サービスの創出に向けてのチャレンジ活動
3. インフォーマルサービスとフォーマルサービスの連携による地域づくりに貢献するチャレンジ活動
4. 医療と介護の連携を実現するためのチャレンジ活動

■助成対象団体

次の2つの要件を満たしている団体（法人格の有無は問いません）

- ①助成テーマにチャレンジする意欲がある団体
- ②他の団体・機関・住民組織等と協働で活動する団体

■助成件数：2件

■助成金額：2年最大400万（1年最大200万）

■助成期間：2016年10月より2年間

■応募期限：2016年5月31日(火)消印有効

実践的研究助成

研究者と実践家が協働して現場の実践をベースにして、実践に役立つ効果をあげるための実践的研究への助成

■助成対象分野・テーマ

- 第1分野：「いつまでも地域で高齢者が安心した生活が送れるまちづくり（地域包括ケア）の推進」
- 第2分野：「高齢者の生きがい・自己実現・就業支援」
- 第3分野：「認知症の人が地域で安心した生活ができるまちづくり」

■助成対象者

- ・実践的課題研究：研究者または実践者
- ・若手実践的課題研究：39才以下の研究者または実践者

■助成件数：

・実践的課題研究：2件・若手実践的課題研究：5件程度

■助成期間と助成金額

- ・実践的課題研究：2016年10月より2年間
1件最大400万（1年最大200万）
- ・若手実践的課題研究：2016年10月より1年間
総額500万（1件最大100万）

■応募期限：2016年6月15日(水)消印有効

■いずれも応募先：日本生命財団高齢社会助成事務局
TEL：06-6204-4013 FAX：06-6204-0120
※詳しくは、次のホームページをご参照下さい。
<http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp>

◎ 北海道立市民活動促進センターのホームページ

では、助成金情報や北海道庁からの役立つ情報などを随時更新中です。ぜひアクセスして下さい。

<http://www.do-shiminkatsudo.jp/>